

東海地方の鳥形木製品

～本川遺跡出土例の検討～

● 飴谷 一・佐藤公保

豊田市に所在する本川遺跡では、平成10年度に発掘調査を実施した調査区から古墳時代中期に属する鳥形木製品が出土した。写實的に表現されたこの木製品は、「胴部両側面に12カ所、上面に2カ所、計14カ所に小孔が見られる」「腹部が浅く刳り抜かれている」という、他の遺跡の出土例には見られない2つの特徴を持つ。

1. はじめに

本稿は本川遺跡で出土した鳥形木製品と東海地方で出土しているものとを比較し、使用法と地域性の検討を試みたものである。

2. 出土状態と時期の検証

本川遺跡は豊田市南部、矢作川右岸の標高20mの沖積地に位置する。遺跡の調査は平成10年度に実施され、弥生時代後期と古墳時代中期の竪穴住居や戦国時代の屋敷地等を確認している。

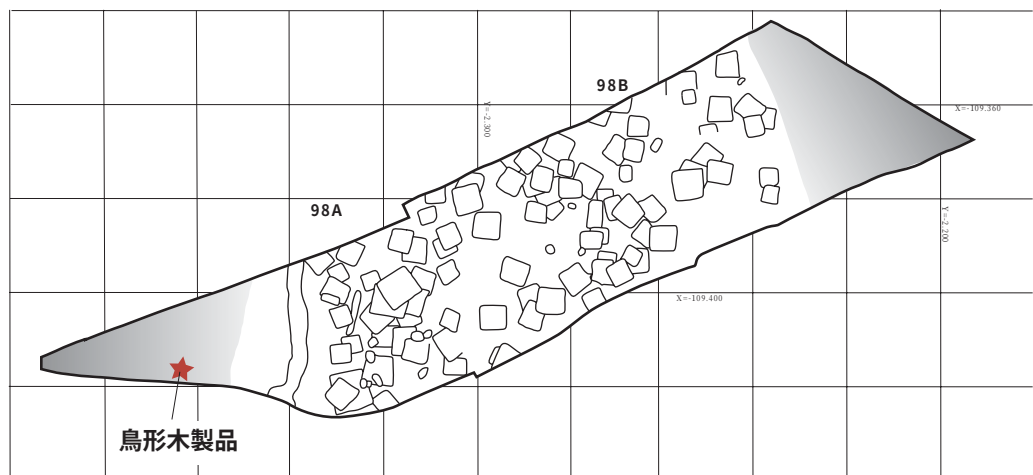
鳥形木製品は集落西端の谷内の窪地から出土している（図1）。窪地の埋土はシルトと植物遺体が互層になり、鳥形木製品が出土した上層で

は多量の流木がみられ、中には加工痕のある木製品も存在した。このことから窪地は幾度も水に浸りながら、その都度、流木等が運び込まれ徐々に埋没していったことが窺える。

窪地の落ち際には杭列がみられ、横木を伴う杭も存在する。当初、窪地内に水田が展開する可能性が高いと思われたが、水田関連遺構は確認できず、窪地の埋土からプラントオパールも一切検出できなかった。このことから窪地は谷が埋没していく過程で形成されたもので、杭等は掘方を維持するために打たれたものと考えられる。

窪地に伴う出土遺物は極めて少なく、鳥形木製品の時期を決定するには至らない。しかし土層の観察により、東に展開する古墳時代中期の溝とほぼ同時期に窪地は埋り始めていることが

図1 鳥形木製品出土地点



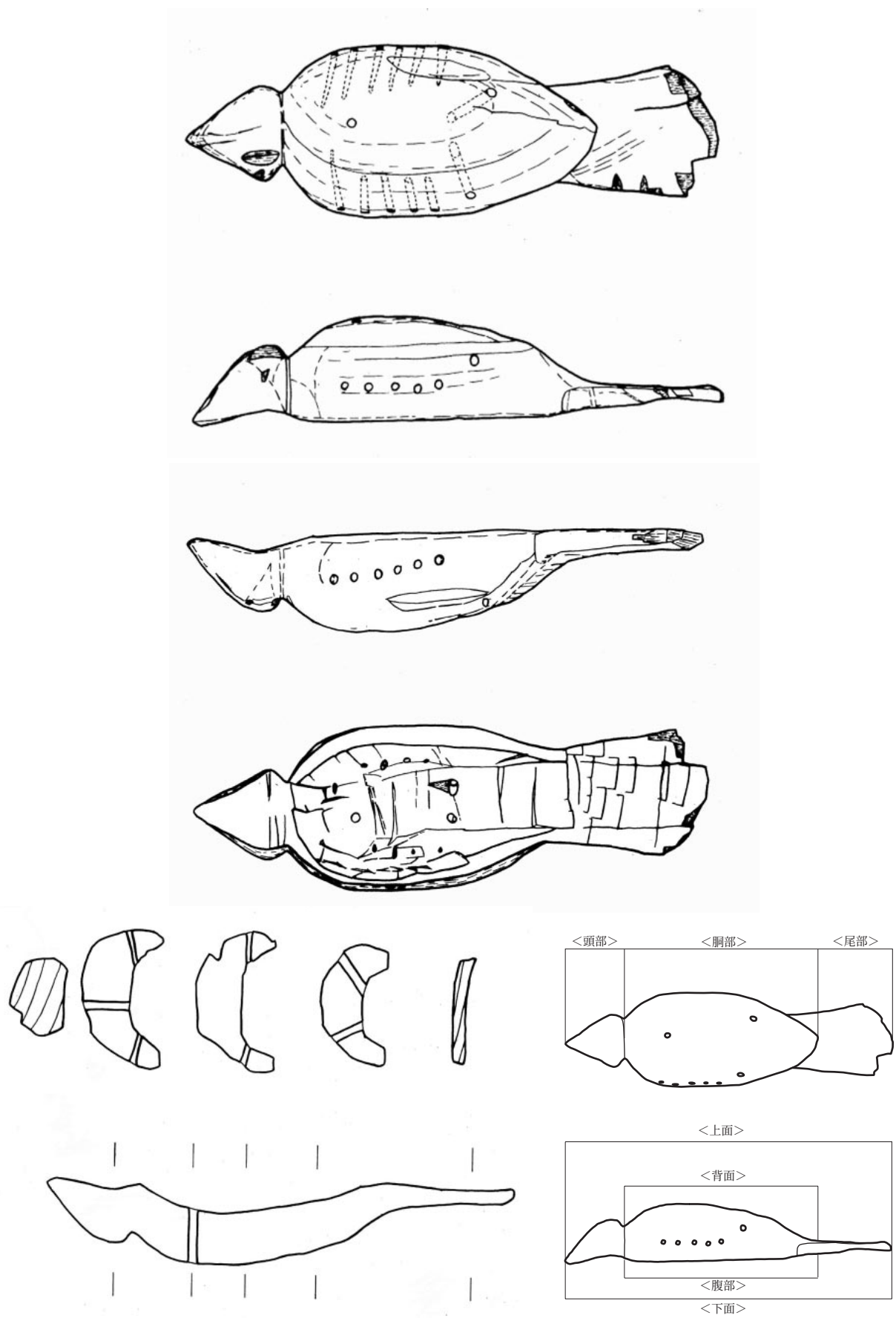


図2 本川遺跡出土の鳥形木製品実測図（1：4）および鳥形木製品部分名称図

判っている。また窪地が形成される以前には溝が存在し、古墳時代中期の古い段階の様相を示す曲柄三又鍬（樋上他 2000）が出土している。

以上の点から、この窪地から出土した鳥形木製品は古墳時代中期に属するものと考えられる。

3. 鳥形木製品の形状

鳥形木製品（図2）は全長 41.4 cm であり、最大幅は胴部上位から中位にあり 12.1 cm を測る。厚さは 1.5～7.3 cm を測り、胴部上位が最も厚く、尾部が最も薄い。尾部の一部が欠損しているが、ほぼ完形に近い。

上または下から見られることを意識した形状であり、頭部・胴部は厚みを持って表現される。頭部の下面はやや前方へ傾くものの、胴部・尾部の下面は平坦であり、いわば半立体的に作り出されている。また、腹部は浅く削り抜かれており、加工痕が明瞭に残る。一方、上面の表面に加工痕は見られないが、遺存状態は非常に良い。

本川遺跡の鳥形木製品の最も大きな特徴は、胴部の両側面と背面に複数の孔が見られることである。右側面には 6 カ所あり、うち先頭の 1 カ所が未貫通であるが、残りは貫通している。最後部の孔は他の孔列から離れやや上に位置するが、他のものは横一列に並ぶ。左側面にも 6 カ所あり、うち 2 番目の 1 カ所が未貫通である。左の孔列は後方に向かいやや下方に向かって並ぶ。両側面の孔は、上から見ると左右対称ではなく、交互に配されている。側面の孔は穿孔が不十分であるのに対し、背面の上位と下位にある 2 カ所の孔は完全に貫通している。

4. 研究史概略

鳥形木製品については、金関恕氏をはじめ先学諸氏によっていくつかの分類が提示され、研究が進められてきた。分類項目は、酒井龍一氏がまとめているように、研究者の「視点」によって異なる（酒井 1998）。これまでに設定されたものを以下に挙げる。

- I：人の視点の位置…どの位置から見た場合に鳥とわかるか
「上から見た場合」と「横から見た場合」
- II：体部の成形方法…部位の作出し方
「立体的に作出したもの」と「平面的に作出したもの」
- III：体部の加工方法…調整痕の差違
「面取りなどをして丸みをもたせ、ていねいなもの」と「手斧痕を残し使用材の側縁部に粗く抉りを入れるもの」
- IV：体部の表現方法（1）…どの状態の鳥をイメージしているか
「飛翔する鳥（動態）を表現するもの」と「翼を閉じた鳥（静態）を表現するもの」
前者については、「翼部が接合される場合」と「翼部が接合されない場合」との下部項目が用意される。
- V：体部の表現方法（2）…形態の差違
「写實的に表現するもの」と「抽象的に表現するもの」
- VI：穿孔の有無
「穿孔が見られるもの」と「穿孔が見られないもの」
前者については、どの部位に見られるのか、そしてどのような穿孔がされているのかを確認しておく必要がある。

これらの分類項目を組み合わせ、各資料のもつ様々な属性に基づき、加えて文献や民俗例などを援用して、性格や用途の復元がされている。これまでのところ、金関恕氏（金関 1982・1986）や春成秀爾氏（春成 1987）に代表される「韓国の蘇塗に見られたような、農耕儀礼に関係する鳥」、水野正好氏（1982）や渡辺誠氏（1995）に代表される「集落の境界を守る鳥」の 2 つの考え方が有力である。

一方、大阪府雁屋遺跡では、中期末の方形周溝墓からの出土例が報告されており、後期にも滋賀県五村遺跡の墳丘墓からの出土例が見られることから、弥生時代の後期には「死者の魂を運ぶ鳥」として葬送儀礼に用いるという（山田 1994）、新しい用途の分化がなされたと考えられる。

5. 分類項目の提示

分類項目の設定については、人が「鳥を表現した木製品と認識できる」視点の位置を大きな基準とした。また各部位が、視覚的に明確に区分できるのか否かという点に着目し、曖昧になりがちな表現方法による形態分類はおこなわなかった。なお、翼部については、資料の提示だけにとどめる。

I 類：上または下から見た場合に鳥を表現したもの

II 類：横から見た場合に鳥を表現したもの

A 類：上面と下面、あるいは側面を扁平に作出す

B 類：上面を立体的に、下面を扁平に作出す
A 類は、いわゆる「板作り」のもので、B 類は、上面のみが、いわゆる「丸彫り」の立体的な表現になっているものである。

a 類：頭部・胴部・尾部とを明確に作出す

b 類：頭部・胴部・尾部との作出しが不明確

以上の分類項目に基づいて、各遺跡から出土した鳥形木製品を見ていくことにする。



図3 鳥形木製品出土遺跡

※1 嬉野町教育委員会和気清章氏の御厚意により、資料を提供していただいた。

※2 未発表資料。調査担当者である本センター職員樋上昇氏より、御教示を受けた。

※3 報告書『朝日遺跡Ⅲ』では、「包含層中出土」となっているが、調査担当者である本センター職員宮腰健司氏の御教示によると、「弥生時代後期の環濠がその機能を停止し、埋没する過程に形成された、溝状の窪地（古墳時代前期初頭）から出土した」とのことである。

6. 東海地方の鳥形木製品

本川遺跡の例も含めて、東海地方では13遺跡において出土例がある。そして出土した部位については、体部23点、翼部13点、その他に鳥形木製品を棒の先端に固定していたと思われる鳥竿状木製品2点、計38点が報告されている。これらの該当時期は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の間であることから、本川遺跡のものとを比較する資料として有効であると考えられる。

1. 三重県片部例（1）※1

古墳時代前期の水田にともなう大規模な灌漑用水路から出土した。頭部と体部が明確に作出されている。I A a 類。

2. 岐阜県今宿例（2・24）

居住域と水田域とを区画する古墳時代前期の大溝から、翼部と接合した状態で出土した。胴部は翼部を重ねるために側面を挟み、頭部と尾部を作出している。また体部・翼部共に、表面には黒い彩色が施されている。I A a 類。

3. 岐阜県米野例（3・4）

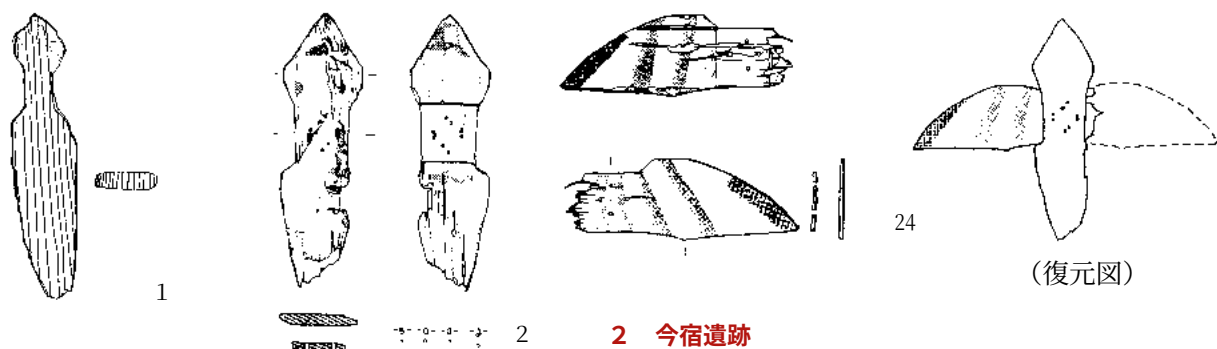
古墳時代前期の運河と思われる大溝から2点出土している。3は胴部に翼部を接合させるための挟みが施され、目釘穴が1つ穿たれている。I A a 類。4は頭部と胴部を作り出しており、断面は緩やかな膨らみを呈する。II A a 類に分類される。またこの大溝からは刀形木製品や舟形木製品も出土している。

4. 愛知県八王子例（5・25・26）

古墳時代前期の祭祀場と見られる井泉の南側にある旧河道から出土した。頭部と体部、尾部を明確に作出している。また体部側面には線刻人面が描かれていることから、線刻文を描いた板材を転用したものである。II A a 類。ほかに翼部が2点※2、刀形木製品も出土している。

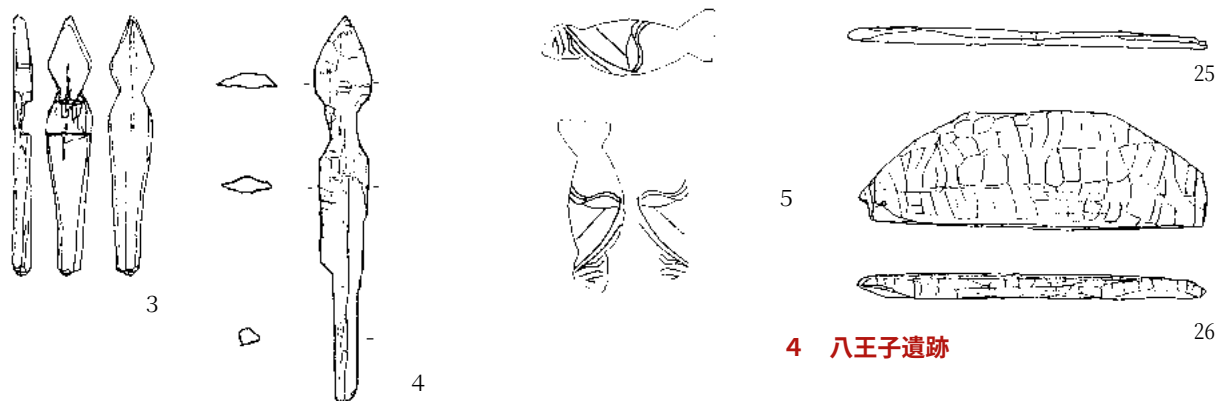
5. 愛知県朝日例（6・7・8※3）

6・7は弥生時代後期の谷上層から出土した。ややデフォルメされているが、頭部と胴部が作り出されており、7には側面に穿孔がなされて



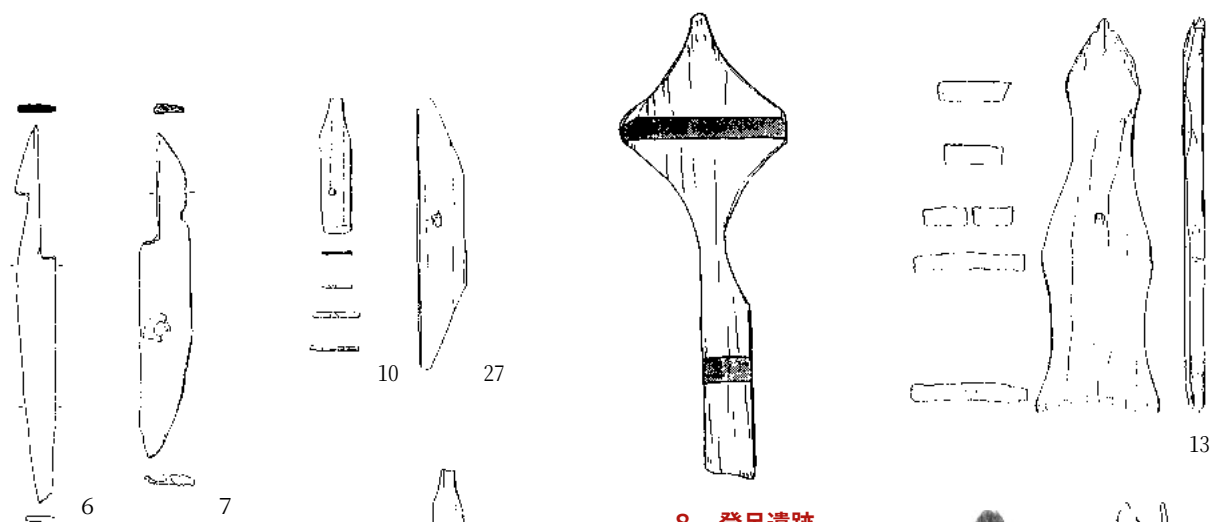
2 今宿遺跡

1 片部遺跡

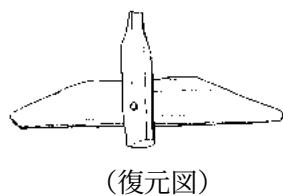


4 八王子遺跡

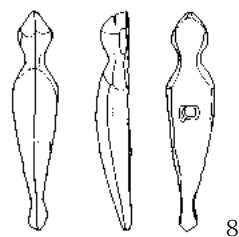
3 米野遺跡



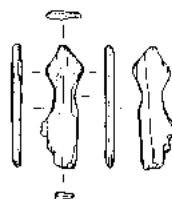
8 登呂遺跡



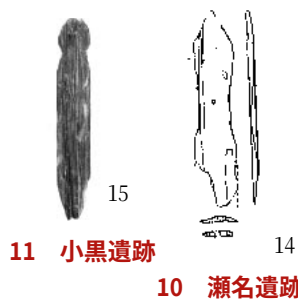
7 住崎遺跡



5 朝日遺跡



9 有東梔子遺跡



11 小黒遺跡

10 瀬名遺跡

図4 東海地方の鳥形木製品1 (8のみ1:4、他1:8)

いる。共にⅡA b類。8はⅠB a類に分類でき、腹部に穿孔が見られるが、貫通はしていない。古墳時代前期の集落の縁辺部から出土した。

7. 愛知県住崎例 (10・27) ※⁴

体部は両端を欠き、頭部は細くしただけのデフォルメされたものである。体部、翼部共に1箇所の穿孔がなされている。ⅠA b類。他に剣形木製品が1点出土している。

8. 静岡県登呂例 (11) ※⁵

体部の両側面は欠損しているが、頭部は、両側面から抉りを入れて作出されている。表面には手斧痕が明瞭に残る。ⅠA a類。

9. 静岡県有東梶子例 (12) ※⁶

12は水田面からの出土である。頭部を作出しているが、胴部下半部は欠損しており、詳細は不明である。ⅠA a類に分類できようか。

10. 静岡県瀬名例 (13・14) ※⁷

弥生時代後期から古墳時代前期初頭の水田から2点が出土した。13は頭部と胴部、尾部を作出しており、表面には明瞭な手斧痕が残る。また頭部先端には、両側から小さな抉りを入れ嘴を表現している。胴部に1箇所穿孔がなされている。14は胴部以下が欠損しており、詳細は不明である。やや長く表現されている頸部には1箇所穿孔が施されている。共にⅠA a類。同時期の水田からは、舟形木製品も出土している。

11. 静岡県小黒例 (15) ※⁸

15は尾部が欠損しているが、体部側面に抉りを入れて、頭部と胴部、尾部とを作出している。表面の加工痕は不明瞭である。ⅠA a類。

12. 静岡県雌鹿塚例 (16～21・28～32) ※⁹

6点いずれもが、集落の立地する微高地縁辺部の低湿地から出土しており、すべてⅠA a類に分類される。16は約90cmの長さをもつ大型製品で、側面から抉りを入れることにより、頭部と胴部、尾部を作出している。そして胴部は緩やかに膨らみ、縦に2列の穿孔が見られる。17はもっとも写実的に成形されており、胴部中央に1箇所の穿孔がなされている。18～20は、両側に方形の翼を表現した独特の形態を呈する。胴部中央の2箇所の穿孔には、やや擦れた痕跡が見ら

れる。21は未製品であろう。また翼部も4点出土している。穿孔部位の状況などから、容器底板を転用したもの(28)、エブリを転用したもの(32)など、他の道具の転用品と見られるものもある。舟形木製品、刀形木製品、男根状木製品が供伴している。

13. 長野県石川条里例 (22・23・33～37)

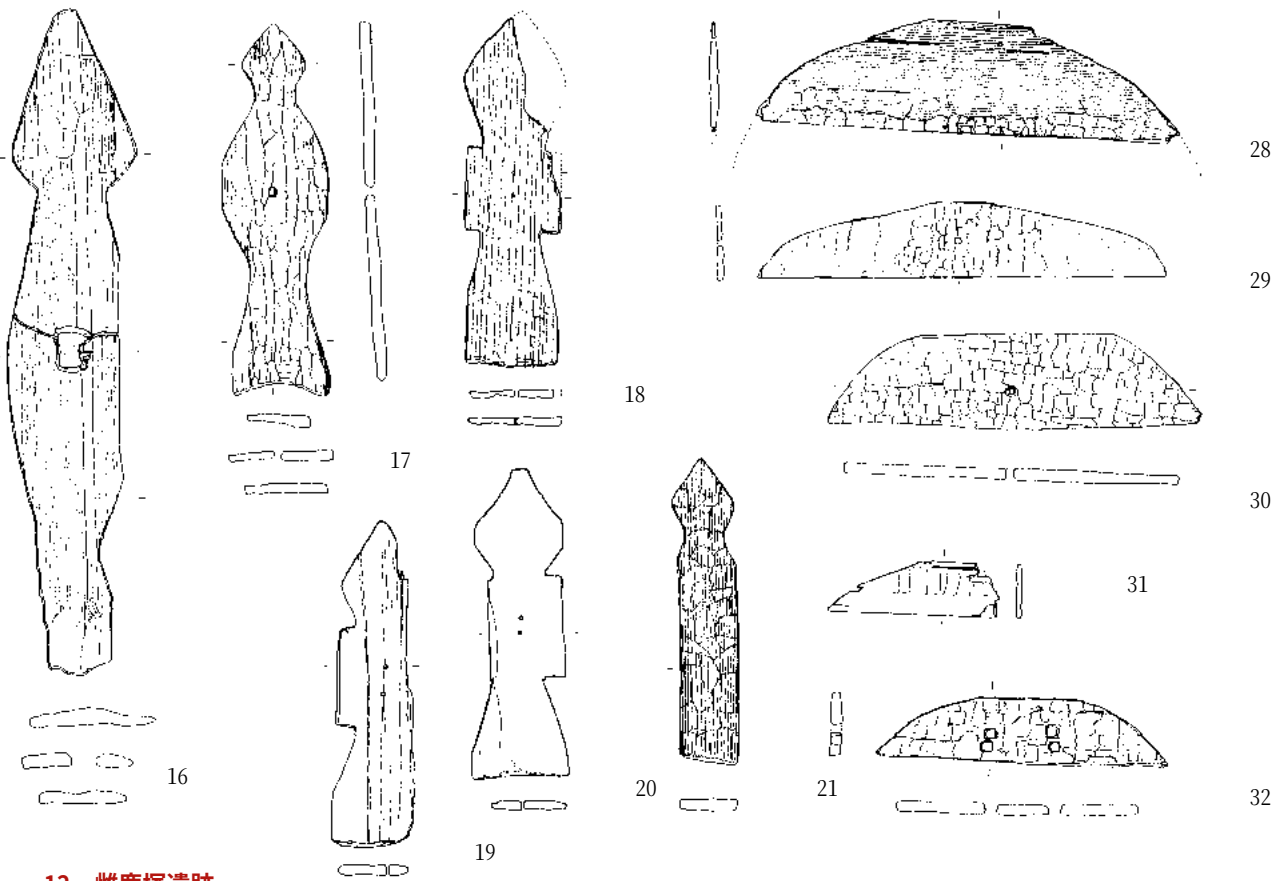
22は頭部を細くしたデフォルメされたものであるが、尾部をやや広げて作出している。体部には翼部と接合する穴を含めて3箇所の穿孔が見られる。23と34は軸部(37)によって接合されたままの状態出土した。23は頭部を細くしただけのデフォルメされたものである。軸部は別材に挿入されていた可能性がある。いずれも古墳時代前期の水田土手上から出土しており、ⅠA b類に分類される。

6. 鳥形木製品の検討

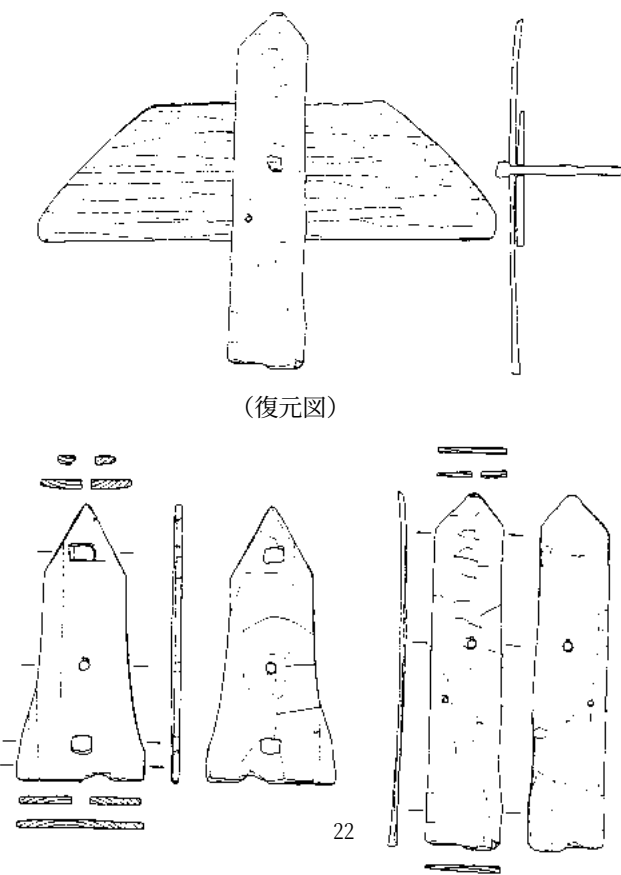
以上の出土例を形態別に見てみると、ⅠA a類14点、ⅠA b類3点、ⅠB a類1点、ⅡA a類2点、ⅡA b類2点となる。ⅠA a類の数が突出する傾向は、山田康弘氏が指摘(山田1996)されているように、東海地方の特徴を表していると言える。そして畿内地方で多く報告されている「体部を立体的に作出し、丸みをもたせた丁寧なつくり」をもつ例は、東海地方においては見られない。朝日遺跡出土例(8)は、小型で上面を立体的に作出す丁寧なつくりがなされている点では共通するが、下面が平坦に作出されている点で異なる。このタイプは他の地域では見られないことから、畿内地方から伝播する過程で変容し、東海地方に定型化したと思われる。また古墳時代前期の段階に初現が認められる、デフォルメされたⅠA b類の例も、近畿地方以西では出土していないことから、東海地方に系譜が求められるタイプである。

装着方法について見てみる。具体的な装着例が明らかなのは、石川条里遺跡出土例のみである。これは、体部・翼部が軸部によって接合した形で出土しており、「鳥形態として、軸部を通し

※⁴ 西尾市教育委員会鈴木とよ江氏の御厚意により、実見させていただいた。 ※⁵ 静岡市立登呂博物館中野有氏の御厚意により、実見させていただいた。 ※⁶ 静岡市教育委員会菊田宗氏の御厚意により、実見させていただいた。なお、『有東梶子遺跡(静岡市教委1987) 30頁第14図25に「鳥形類似」と報告されている遺物は、鳥形木製品とは認め難く、今回の対象とはしなかった。 ※⁷ 静岡県埋蔵文化財研究所大石泉氏の御厚意により、実見させていただいた。 ※⁸ 未報告資料。静岡市立登呂博物館中野有氏の御厚意により、実見させていただき、図版の掲載の許可を得た。 ※⁹ 沼津市教育委員会笹原芳郎氏の御厚意により、実見させていただいた。



12 雌鹿塚遺跡



13 石川条里遺跡

図5 東海地方の鳥形木製品2 (雌鹿塚1:10・石川条里1:8)

て竿、板などの台木にはめ込まれ」た様子が復元できる（臼居：1997）。今宿遺跡出土例は、体部と翼部が目釘によって接合されている。これらを含めて、体部にほぞ穴が穿たれている例は14点見られた。朝日遺跡出土例（7）を除いて、いずれもⅠ類である。これらは1cm以上の大きさの穴が1ないし2つ穿たれているものと小さな貫通孔を2つ以上穿つものとに分かれ、穿孔の数は一定していない。これは翼部との装着方法の違い、あるいは用途の違いによるものと思われる。また、Ⅱ類については、柄に切り込みを入れて挟み込んで装着されたと考えられる（山田：1996）。

体部・翼部あわせた、出土した遺構別の点数は、水田関連遺構11点、旧河道・谷地形6点、大溝2点、包含層15点、不明・その他3点である。形態別に出土した遺構を見ていくと、もっとも多くの出土例が見られた水田関連遺構では、ⅠA a類5点、ⅠA b類2点を数える。以下、旧河道・谷地形では、ⅡA a類1点、ⅡA b類2点、大溝では、ⅠA a類1点、ⅡA a類1点である。このような遺構から出土する鳥形木製品には、武器形木製品、舟形木製品、男根状木製品が供伴する人が多いことから、水に関わる農耕儀礼を執り行うときのセットであった可能性もある。集落の周縁の包含層から出土した雌鹿塚遺跡の場合も、こうした木製品をともなっており、また出土例（26）・（32）のように、農具と思われる木製品から転用して製作していることから、鳥形木製品が農耕祭祀に関わる道具であったことが窺われる。

一方、朝日遺跡出土例（8）のタイプは、集落の縁辺付近から出土している。こうした出土地点は、前記したA類の場合と異なり、外界と居住域との境界にあたる。したがって、水野氏・渡辺氏の言う「境界を守る鳥」として「出入口での使用を肯定することは可能」（鈴木：1996）と言える。

7. 本川遺跡の鳥形木製品の位置づけ

東海地方から出土した鳥形木製品の形態、出土地点について検討を加えてきた。これらをもとに本川遺跡から出土した鳥形木製品を考えてみよう。

本川遺跡の鳥形木製品は、今までに例のない特徴がいくつか見られる。そこで、今一度その特徴をまとめてみる。

1. ⅠB a類に分類される。すなわち、上または下から見た場合に鳥を表現しており、上面を立体的に、下面を扁平に作出している。そして、頭部・胴部・尾部の各部位を明確に区分できる。

2. 腹部は、浅く削り抜かれている。

3. 上面の表面に加工痕は見られないが、削り抜かれた腹部および尾部下面には、明瞭な加工痕が残る。

4. 胴部の両側面に6ヶ所ずつの小孔が穿たれているが、対称にはならない。そのうち、右側5ヶ所、左側5ヶ所が貫通している。また、胴部の上面にも貫通する2つの穿孔が見られる。

5. 出土地点は、集落の西の境界となる谷地形に形成された窪地である。周辺遺構との前後関係から、古墳時代中期に属する。

以上の点から、次のことが言えよう。

A：上面のみであるが、体部を立体的に作出している形態は、朝日遺跡出土例（8）に類似する。そして出土地点も、「集落の縁辺」と共通点が見られる。一方、朝日遺跡のものは近畿地方の鳥形木製品に見られるような腹部に穿孔が施されるのに対して、本川遺跡のものは浅く削り抜かれている。したがって、装着法は異なっていたと思われる。

また、朝日遺跡の例が古墳時代前期に属するのに対し、本川遺跡の例は古墳時代中期に属するという、所属時期の相違がある。加えて、前者が尾張、後者が三河の出土という出土地域でも異なる。

これらの点から、両者を直接的な系譜で結ぶ

ことは難しい。しかし、共に「半立体」的で「境界地点から出土した」という点では共通している。対して、板作りされた「平面」的のものは、舟形木製品や武器形木製品、男根状木製品と供伴した形で、水田関連遺構を含めた水に関わる遺構からの出土例が多い。このことから、「半立体」型と「平面」型とに、用途の差異を考えることができる。したがって、本川遺跡出土例と朝日遺跡出土例(8)を1つのグループとしてみることは可能である。

今後、東海地方において、このタイプの鳥形木製品の資料の増加を待ちたい。

B：特に体部の下面に、加工痕が明瞭に残っている。長時間固定した状態で使用したとすれば、摩擦や風化によって加工痕が不明瞭となり、あるいは胴部に穿たれた小穴も擦れるであろう。出土状況からは、その使用法を復元することは困難であるが、長期間にわたって外部にさらさ

れて使用したものであるとは考えにくい。

C：両側面に6ヶ所ずつ、上面に2ヶ所の計14ヶ所の穿孔が見られるが、すべては貫通していない。体部にこれほど穿孔がなされている鳥形木製品は、各時代に出土しているものを探しても見当たらない。側面の小穴については、シベリアの例(栢本:1993)にもあるように、実際に羽根が差し込まれていた可能性もある。また、上面の2ヶ所の小穴については、装飾を施すためのものか、もしくは固定用のためのものであった可能性がある。

本稿をまとめるにあたり、本センター職員の樋上 昇氏には木製品についての様々な助言をいただいたのをはじめ、次の方々に御教示をいただき、お世話になった。記して感謝の気持ちに代えることとしたい。(敬称略)

浅野毅、大石泉、菊田宗、笹原芳郎、鈴木とよ江、中野宥、山田康弘、和気清章、渡辺 誠

引用・参考文献

- | | |
|-------|---|
| 白居直之 | 1997「第3節 祭祀具」『石川条里遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 |
| 金関恕 | 1982「神を招く鳥」小林行雄博士古稀記念論文集刊委員会編『考古学論考』平凡社 |
| 金関恕 | 1986「呪術と祭」『岩波講座日本考古学』第4巻岩波書店 |
| 酒井龍一 | 1998「鳥形木製品の考古学—その研究に見通しはあるか—」『日本の信仰遺跡』雄山閣 |
| 鈴木とよ江 | 1996「第3節 鳥形木製品について」『住崎遺跡』西尾市教育委員会 |
| 樋上昇ほか | 2000「豊田地区出土の木製品について」本書収録 |
| 春成秀爾 | 1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集 |
| 栢本哲 | 1993「鳥形をめぐる儀礼の研究ノート—シベリア諸民族に見られる鳥形使用の儀礼の分析から—」『大阪府弥生文化博物館研究報告』第2集 |
| 水野正好 | 1982「弥生時代のまつり」『歴史古論』第82号 雄山閣 |
| 山田康弘 | 1994「祭りを演出する道具—弥生時代の鳥形木製品—」『季刊考古学』第47号雄山閣 |
| 山田康弘 | 1996「鳥形木製品の再検討」『信濃』第48巻第4号 |
| 渡辺誠 | 1995「韓国の蘇塗と弥生時代の鳥形木製品」『西谷眞治先生古稀記念論文集』西谷眞治先生のお祝いの会 |

図版出典 ※番号は図4・5および表1に対応する。

- 嬉野町教育委員会 1996『片部遺跡4次調査現地 説明会資料』
- 春日井 恒編 1998『今宿遺跡 ソフトピアジャパン造成工事に伴う緊急発掘報告書』岐阜県土地開発公社・財団法人岐阜県文化財保護センター
- 嬉野町教育委員会主催「海・港・交流」シンポジウム(1999)にて、大垣市教育委員会高田康成氏による発表資料から転載
- 赤塚次郎 1996「八王子遺跡出土の線刻人面が描かれた鳥形木製品」『埋蔵文化財愛知』№48
- 宮腰健司編 1992『朝日遺跡Ⅲ』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木とよ江編 1996『住崎遺跡』西尾市教育委員会
- 山田康弘 1996「鳥形木製品の再検討」『信濃』第48巻第4号「第3図-6」より転載
- 伊藤寿夫他 1989『有東榎子遺跡Ⅱ 第3次発掘調査報告書』静岡市教育委員会
- 中山正典他 1994『瀬名遺跡Ⅲ 遺物編Ⅰ』(財)静岡県埋蔵文化財研究所
- 望月由佳子編 1996『瀬名遺跡Ⅴ 遺物編Ⅱ』(財)静岡県埋蔵文化財研究所
- 石川治夫 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』沼津市教育委員会
- 市川隆之他 1997『石川条里遺跡』長野県教育委員会

体部

	遺跡名	所在地	出土部位	分類	所属時期	全長 (残存長) (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	穿孔数	備考
1	片部	三重県嬉野町	体部	I Aa	古墳時代前期	30.4	6.9	1.9	水田脇水路		
2	今宿	岐阜県大垣市	体部	I Aa	古墳時代前期	29.4	8.4	1.2	水田脇水路	4	彩色有
3	米野	岐阜県大垣市	体部	I Aa	古墳時代前期	27.3	4.5	2.0	大溝（運河?）	1	羽部との接合面有
4	米野	岐阜県大垣市	体部	I Aa	古墳時代前期	40.4	6.1	1.9	大溝（運河?）		
5	八王子	愛知県一宮市	体部	II Aa	古墳時代前期	9.0	3.0	0.3	旧河道		線刻人面
6	朝日	愛知県清洲町	体部	II Ab	弥生時代後期	39.6	4.1	0.7	旧河道（谷上層）		
7	朝日	愛知県清洲町	体部	II Ab	弥生時代後期	34.0	5.5	1.0	旧河道（谷上層）	1	
8	朝日	愛知県清洲町	体部	I Ba	弥生時代後期	11.2	2.6	1.7	環濠	1	
9	本川	愛知県豊田市	体部	I Ba	古墳時代中期	41.4	12.1	7.3	谷中層	14	両側面に6箇所の穿孔
10	住崎	愛知県西尾市	体部	I Ab	古墳時代前期	14.6	3.2	0.4	包含層	1	
11	登呂	静岡県静岡市	体部	I Aa?	弥生時代後期	44.1	7.2	一	集落付近?		
12	有東樋子	静岡県静岡市	体部?	II Ab	弥生時代後期	22.4	4.5	2.6	水田脇水路		
13	有東樋子	静岡県静岡市	体部	I Aa?	弥生時代後期	13.0	3.9	0.9	水田面		
14	瀬名	静岡県静岡市	体部	I Aa	弥生時代後期	40.1	11.3	2.0	水田畦畔杭列中	1	
15	瀬名	静岡県静岡市	体部	I Aa?	弥生時代後期	20.3	4.3	0.8	水田畦畔内	1	
16	小黑	静岡県静岡市	体部	I Aa	古墳時代前期	20.8	3.9	0.4			
17	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	I Aa	弥生時代後期	89.4	15.1	2.4	包含層	1	
18	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	I Aa	弥生時代後期	49.9	14.6	1.5	包含層	1	
19	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	I Aa	弥生時代後期	47.0	12.9	1.2	包含層	2	
20	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	I Aa	弥生時代後期	43.2	10.9	1.4	包含層	2	
21	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	I Aa	弥生時代後期	40.9	12.9	1.1	包含層	2	
22	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	I Aa?	弥生時代後期	40.2	8.4	1.6	包含層		未製品?
23	石川条里	長野県長野市	体部	I Ab	古墳時代前期	37.9	8.1	1.0	水田跡内の溝	3	
24	石川条里	長野県長野市	体部	I Ab	古墳時代前期	29.3	13.5	1.0	水田跡内の溝	2	

18

翼部

	遺跡名	所在地	出土部位	所属時期	全長 (残存長) (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	穿孔数	備考
25	今宿	岐阜県大垣市	翼部	古墳時代前期	24.8	8.7	0.6	水田脇水路	4	2と接合、彩色有
26	八王子	愛知県一宮市	翼部	古墳時代前期	38.5	7.5	1.5	旧河道	1	
27	八王子	愛知県一宮市	翼部	古墳時代前期	37.0	12.9	2.6	旧河道		
28	住崎	愛知県西尾市	翼部	古墳時代前期	29.2	5.3	0.7	包含層	1	10と接合
29	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	56.5	15.0	1.1	包含層	1	容器底板材転用?
30	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	54.4	10.3	0.9	包含層	1	
31	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	50.0	12.8	1.7	包含層	1	18と接合
32	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	22.8	7.2	0.7	包含層		
33	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	38.9	9.0	1.5	包含層	4	エブリの転用?
34	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期	48.0	14.5	0.8	水田跡内の溝	2	23と接合
35	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期	11.5	34.5	0.9	水田跡内の溝	1	24と接合
36	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期?	34.1	8.4	1.3	水田跡内の溝	2	
37	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期	8.7	35.9	1.7	水田跡内の溝		

鳥竿類

	遺跡名	所在地	出土部位	所属時期	全長 (残存長) (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	穿孔数	備考
34	石川条里	長野県長野市	軸部	古墳時代前期	13.7	2	1.4	水田跡内の溝		差込み部径1.1cm
39	石川条里	長野県長野市	鳥竿?	古墳時代前期	152		径5.1	水田跡内の溝		